



The Wild Rover

～未来への海路を拓く 同志社大学～

第12回

学際的な研究で リスク社会の本質に 多角的にアプローチ

多種多様なリスクが高まる現代社会で、人が生きることにかわるリスクの本質とは何か。回避する手立てはどうあるべきか。セコム会長の木村昌平氏と、同志社大学ライフリスク研究センターの橋本俊詔センター長が語り合った。



橋本俊詔 (たちばなぎ・としあき)
同志社大学経済学部教授
同志社大学ライフリスク研究センターセンター長
小樽商科大学、大阪大学大学院を経て、1973年ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了 (Ph.D.)。京都大学、大阪大学、スタンフォード大学などで教職を歴任。2007年より同志社大学教授。

リスク意識は著しく変化 未然防止が問われる時代へ

木村 同志社大学では昨年、「ライフリスク研究センター」を開設されたそうですね。近年、企業にとっても、個人においても、リスクにどう対処するかが重要な課題になってきています。非常に時機を得たご決断だと思います。橋本 人は生まれてから生を終えるまで、さまざまなリスクに直面します。最近では生まれる際も、産婦人科の不足に伴うリスクの上昇がある。一種の保険制度がギリシア・ローマ時代には

であつたように、人間はこれまで常にリスクとともに歩んできましたが、特に現在は社会環境が急激に変化し、リスクは多様化しているんですね。では、社会や人はどうしたらいいのかが、その対応策を総合的に追究していくことが、センターのテーマなんです。

木村 ご指摘のように、リスクにかかわるビジネスは古い歴史をもっています。例えば、アメリカの西部開拓時代の保安官は、自分たちの町を自分たちで守ろうという発想から生まれた。現存する民間警備会社のなかには、保安官制度にルーツをもつものもあるんで

す。セコムは東京五輪の選手村の警備から出発しました。ただ、当時の日本社会の認識は「水と安全はタダ」。その後、意識は相当変わりましたね。橋本 リスクに対する考え方も、以前は事が起きたときの対処が中心でしたが、現在では事を未然に防ぐという観点ももう一つの柱になっている。

木村 まさにそのとおりです。ある日本企業が、オンラインのセキュリティを守ろうと早期から対策を取っていた。それを提携先を探していたアメリカの企業が評価し、提携が決まったという事例があるんです。すでに米国においては、リスク対策が企業価値の指標のひとつなんです。

橋本 複雑化するリスクに対応するためには、多角的なアプローチが必要なんです。このためライフリスク研究センターは、経済学や心理学、社会学、工学、生命医学など多彩な分野の研究者が集まり、学際的な研究を進めています。

木村 これまでになかったアプローチですね。学際的な研究が行なわれるというのは非常にありがたい。橋本 例えば、「手術中の停電」というリスクがあります。医療現場にとつては、リスクを回避するために自家発電体制にどれだけ投資をしたらいいか、切実な問題です。しかし、これを解決するには理工系をはじめ、さまざまな知見が必要となる。つまりは、そういうことです。来年度から同志社大は二二学部になりますし、学部間の連携も強い。今回の研究センター設置は、同志社大学の総合力を生かせるかと自負しています。

木村 社会が変化し、リスクをコントロールしようという方向へ変わってきていますから、総合的な視点での研究は本当に重要です。セコムも出発点

は警備業でしたが、ITシステムの導入により安全産業へと発展し、さらに現在では社会に安全と安心を提供する「社会システム産業」を掲げています。安全はテクノロジーで守ることができ、安心は心の問題。両方を組み合わせたサービスを提供していかないとお客様の満足は得られない時代になっています。

橋本 私もリスクにかかわる研究のなかで「安心」は非常に重要なテーマだと考えています。実は、研究センターのテーマの一つが、リスクに遭遇した人とその家族の心のケアなんです。例えば家族が亡くなった場合、支払われる保険金や補償金だけでは心のリスクは解決されません。リスクにあつた当事者へのケアはどうあるべきか解き明かしていきたいと考えています。

木村 好ましい話ではありませんが、やはり日本人も生活そのものとしてリスクとの関わりを考えないといけない時代になっていきますね。

橋本 情報漏洩やコンピュータウイルス被害は頻発していますし、インター

ネット上の犯罪予告が実際の事件になつた例もある。ITの発展が新しいリスクを生み出したことも否めません。木村 インターネットの特徴の一つである匿名性が、リスクの変質に拍車をかけたといえますね。また、ビジネスのグローバル化とともに、犯罪もグローバル化している。企業も、改めてリスクとその対策を考えるべき時期にきていると思います。

行動する良心が 安全、安心な社会をつくる

橋本 木村会長は、リスクにかかわるプロとして、今後どういう事業展開を考えておられるんですか。

木村 「あらゆる不安のない社会の創造」というのが当社のビジョンなんです。ですから、ライフサイクルにかかわるすべてをサービスの対象としていきたい。製造業でもサービス業でもない二一世紀型のビジネスを展開していきたいと考えています。

橋本 既存産業から抵抗があるのでは、木村 社会から見てもやるべきであり、

リスク社会の本質的構造を明らかにする 「ライフリスク研究センター」開設

昨年12月に開設された「同志社大学ライフリスク研究センター」は、さまざまなリスクを個別に研究するのではなく、リスク社会の本質的構造を明らかにし、有効性の高い政策を提示することを目的としている。研究のパートは下記の4つ。既存の研究手法や学問領域にとらわれず、「人の一生」にかかわるさまざまなリスクを学際的に研究していく。また、リスクに遭遇した「当事者のケア」をテーマの一つとしていることも、大きな特徴。当事者がどのような行動を取り、それが最適行動からどのように乖離するかについての分析も行なうことにより、当事者に対する適切なケアはどうあるべきかを探索。

- 4つの研究パート
- 社会保障とケア
医療・年金、介護のリスク削減機能分析。リスクに対する福祉政策の分析。
 - 女性のライフリスク
就労・結婚・出産リスクとワークライフバランス問題の分析。
 - 教育と稼働のライフリスク
雇用可能性問題と失業・低所得問題の分析。
 - 社会システムのリスク
ヒューマンセキュリティ論、事故リスク・災害リスク分析。

有益かつ最善のものをやるというのが、当社の哲学であり、憲法です。社会のお役に立つものなら、どんなに抵抗があつても突破していきます。橋本 そのくらの気持ちではないと、リスクには立ち向かえない。リスク管理の不徹底から、信頼を損なつた企業も少なくないですからね。ライフリスク研究センターでは、経営リスクに対しては問題意識をもちつつ、まず生活者の視点からリスクを考えていこうというスタンスです。日本は少子高齢化というリスクを抱えていますし、人生や暮らしの豊かさに直結するワークライフバランスという問題もある。研究成果を政策提言へとつなげていきたいと思つています。

木村 安全、安心を考えると、「信頼」という視点が重要だと思つています。サ

ププライム問題にして、企業の不祥事にして、社会のリスクは国や企業の指導者の良心に帰結します。私は経営者にとって一番大事なのは、モラルであり良心だと思つています。それもただ座しているだけではない。同志社大学の創立者である新島襄が命懸けで海を越えたような、行動する良心が大事でしょうね。その意味でも私は、良心教育を貫く同志社大学の卒業生であることを、誇りに思っています。

橋本 セコムは、女性問題や教育に関するリスクの研究もなされていると聞きました。良心を機軸とし、人を幸せにできるリスク研究をコラボレートしたいですね。

木村 同感です。企業人として良心教育による人材育成にも、今後の研究にも期待しています。



木村昌夫 (きむら・しょうへい)
セコム株 取締役会長
1967年に同志社大学文学部を卒業し、日本警備保障株(現セコム)に入社。社長企画管理課長、電算部長、企画室長、人事部長などを経て、2002年に代表取締役社長に就任。05年より現職。

「The Wild Rover ～未来への海路を拓く 同志社大学～」は、いま同志社大学が取り組む教育・研究の最前線をお伝えするシリーズ企画です。

The Wild Rover (ザ・ワイルド・ローヴァー) は、同志社大学の創立者である新島襄がアメリカに渡る際に乗った船の名前。つねに未来への挑戦を続ける同志社大学のシンボルとなっている。